松本滋学兄をお偲びして

宮田　元

松本滋学兄と最後のお別れをしてから，はや一年がたとうとしている。平成 21 年の 12 月末，奥様の訃報を直接にお電話で聞いたのが，最後の声となった。それから三ヶ月もたたぬうちに，松本さんは後を追うように旅立っていかれた。まだまだお元気でお会いできると思っていたのに，今はかなわぬこととなってしまった。まだやりたいことがあると洩らしておられたと後から聞いたが，さぞかし残念なことであったろうと悔やまれてならない。

松本さんは，学年こそ大学院での一年上の先輩であるが，私にとっては，何かにつけ大変よくお世話になった，尊敬するよき先輩であった。私が駒場から宗教学の大学院へ入ることが出来たのも，松本さんから宗教学の学問的魅力について聞かしてもらったからに他ならない。実際に本もお借りして勉強したことを思い出す。

当時，駒場の教養学科の恩師である中屋健一先生と岸本英夫先生とはアメリカ研究を通してかかわりをもっておられたので，入学後，私も岸本先生のご指導を仰ぐことになった。岸本先生は，研究と仕事を両立させることが大切だとよくお話しくださっていたが，なかなかむつかしいことではあった。しかし，松本さんは見事にそれを実践されていた。昭和 33 年，日本で初めて第 9 回国際宗教学･宗教史学会が開催された時，岸本先生の下で事務局の要として大役を果たされたことは今も記憶に残っている。

松本さんは若い頃信仰と学問のはざまで悩まれたことがあった。祖父の代からの天理教の教会に育ち，文科一類から敢えて昭和 27 年に文学部宗教学科に進学されたのは，宗教と真正面から立ち向かってみようという思いからであったと述懐されている。そこで出会ったのが岸本先生であった。先生からは，人間の営みとしての宗教をすべて温かい目で見ることを教えられ，今まで批判的であった心もほぐれて宗教理解の方向へ移ることができたと述べられている。昭和 36 年 1 月には，ご父君の重病に際して信仰的な決断を迫られる転機に立ち，深い悩みの中で，岸本先生とご同席の上，中山正善天理教二代真柱様から趣味としてでもよいから学問を続けよとご助言を頂いたという。「アイデンティティーの危機」にあって「父なるもの」が大きな意味を持つとして，後年，そのときのことに触れて，三人の〈父〉に恵まれたと語っている。昭和 37 年には，岸本先生の重ねての推挙でハーヴァード大学院への留学が実現した。留学中には私も一度お訪ねしたが，ケンブリッジからエマソンゆかりのコンコードまでバスで手弁当を持ってご一緒して頂いたことも今は懐かしい思い出となっている。

ハーヴァードでの留学の成果を挙げて帰国後，昭和 42 年には，天理大学の専任講師に迎えられ，東京大学の国際交流との掛持ちで，東京･天理間の毎週の往復が始まった。当時すでに新幹線が走っており，多忙な中にも楽しんで通っておられたようである。昭和 44

年からは，聖心女子大学が本務校となったため，天理大学には毎週月曜日に授業を担当してもらうことになった。その間，宗教学会での研究発表は毎年続けると定めて，ある時期までは実行しておられた。そこには私たち後輩に対して，研究への励ましもあったものと思われる。

松本さんは，その後，研究と仕事を両立させる常人を超えた活躍の中で，研究の成果も着々と挙げられ，宗教学から始まって，『宗教心理学』，『本居宣長の思想と心理』，『父性的宗教母性的宗教』などの著書を次々と出し，さらには，研究は天理教の教理にまで及び，『天理教の信仰と思想１－３』，『神へ近づく道』，『心を育てる』などを著わした。

天理大学では三十余年にわたって，宗教学や宗教心理学を講じて，大勢の学生を育ててくださった。とくに，信仰と学問については，自らの信念と体験を踏まえて，若い学生たちの教育的指導にも当たって頂いた。また，天理大学宗教学科の将来を担う人材の育成の上に，大学院への進学や海外への留学にも積極的に力を貸し，東京での勉学のお世話取りも含めていろいろと便宜を図ってくださっていた。改めて深い敬意と感謝の念を強くするものである。

後年，大学や教会での仕事が忙しくなる中でも，天理大学での講義は続け，学生も毎週お会いできるのを楽しみにしていた。京都駅での乗り換えのとき，新幹線のホームから近鉄のホームまで 1 分間で走るとよく言っておられたが，時間を惜しんで東京･天理間を往復されていたことが懐かしく思い出される。ただ，晩年，何かの席で，僕には日曜日がなかったと，ふと口にされたことが今も私の耳に鮮烈に残っている。日曜日になるといつも東京をたって天理に向われていたのである。

いつも明るい元気なお顔で接してくださった松本さんには，会うたびに心に元気をもらっていた。まだお会いできるような気がしてならないが，今はただしばしの休息をとるべく，親神の胸に抱かれて再び元気な姿で帰ってきてくださるよう祈りつつ，永年の温かいご指導とご厚誼に対して，松本滋学兄へ心からの謝意を表したい。（平成 23 年 3 月 14 日）